村上一郎著作集　第四巻

村上一郎著作集

第四巻

監修
吉本隆明
金子兜太
桶谷秀昭

国文社

村上一郎著作集　第四巻
思想論Ⅱ

1981年6月15日初版第1刷発行
定価5800円

著作権者　村上栄美©

発行者　前島　俶
発行所　国文社
東京都豊島区南池袋 1—17—3
電話　東京 987—2865
振替　東京 8—195058

印刷　田向印刷
製本　並木製本

村上一郎著作集　第四巻　目次

日本軍隊論序説　9
戊辰戦争　11
——宇都宮から箱館まで
北越戦争と河井継之助　50
河井継之助の国家観　83
戊辰顚末　88
日本軍隊論序説　110
——問題提起のための四つのスケッチ
山県有朋とその軍閥形成　160
「日本軍隊論序説」の著者村上一郎氏に聞く　186
戦中派の条理と不条理　193
山田宗睦批判　227
体制論への視点　263
経験の美学と均衡の力学　299
——「開かれた民主主義」の源流をめぐって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一軍人の思想
——今村均大将回想録の今日的座標 350
戦後史の思想的争点
——〝戦後〟とは何でなければならぬか 356
時評二題 378
尚武のこころとは何か 389
「戦略・戦術論」のための序章
——日本人にとってたたかいのこころとは何か 426
〝文武両道〟とはいかなることか
——島田謹二教授『ロシアにおける広瀬武夫』の軍神観 439
くに女覚え書
——村上一族の人びと 453
わが撃攘
——なぜ外人の言に耳を傾けないか 459
おんな・ふらぐめんて 469
危険思想を思想する思想 472
情念のアポリア 486
土方歳三の家 496

子年のお騒ぎ　499
——水戸天狗党ふらぐめんて
「攘夷」の思想と日本人　502
——本居宣長と吉田松陰と五・一五と
明治維新の放浪者　511
松陰先生の狂愚と冷徹　520
——安政五年・六年を中心に
五・一五、二・二六事件関係書にふれて　530
藤田東湖　534
関ヶ原役の政略・戦略　537
藩政改革とはなにか　545
真の日中友好とは　558
——橋川文三『順逆の思想——脱亜論以後』
水戸学と藤田東湖　560
幻の起義者・北一輝　577
昭和維新のゆくたて　585
——津久井龍雄著『証言 昭和維新』
女の美しさ　587
——水前寺清子とソフィア・ローレン

北一輝の革命思想 590
わがレクウィム 598
——降る雪に明治村を思う
ある社頭にて 608
天狗党 611
〈生存感覚〉を現場として 614
——小山俊一『EX—POST通信』
天皇の名 616
己れへの「忠」社会への「義」 619
——古賀斌著『武士道論考』
徳川斉昭 621
——失意の大イデオローグ
心性は回帰しない 634
——内村剛介『幕末は終末』
解説 吉本隆明 637
解題 樋口 覚 651
題簽 黒沢充夫

村上一郎著作集　第四巻　思想論Ⅱ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

日本軍隊論序説

故猪瀬徳霊位に（大岡昇平『レイテ戦記』終章参照）

戊辰戦争——宇都宮から箱館まで

内戦論の困難性

今日、わたしひとりの力で維新内戦についての総論をとりまとめることは、ほとんど不可能である。これはわたしの不勉強にもよるが、それだけではない。明治維新を社会経済の構造の変革の上でとらえてゆこうとする試みは多くの人の関心をひいても、維新の内戦そのものの過程を内側から分析し、そこに何らかの内戦の論理を形成しようとする考え方は、今日、気運として乏しいのである。明治百年を記念して、いくつかの内戦史も現れたけれども、一方に天下の大勢や政治過程の変遷を述べておき、急転して合戦現場のいきさつを叙してその双方をむりにつなげようとするような態度のものが多く、内戦内部の論理は十分に取り出されてはいないのではないかと疑われる。

戦争の論理はやはり戦争の内部にあるのであって、政治の論理や経済の論理を外部から当てはめることはできないように思われる。戦争は他の手段をもってする政治の継続であるというクラウゼヴィッツの定義は、巨視的には正しさをもっているかもしれないし、どんな戦いも階級闘争に他ならないというマルクスやエンゲルスの定義もこれまた正しいであろう。しかし、それらの定義だけでどんな戦争もが割り切れるものではない。またクラウゼヴィッツにせよマルクスにせよ、原典に当ってみるなら、各処でそうとうにニュアンスの違った表現を試み

てもいる。しかも、明治維新の総体が階級的に正当にとらえられているかというなら、それもまた未だしであって、むしろ現在わたしたちは、そのような巨視的な把握にいたるまでの地がためをしておかねばならぬところにいる。（一九三六年、紅軍大学教科書参照）

三一書房『明治の群像』の「戊辰戦争」におさめた、相楽総三ら赤報隊に関するしまね・きよしの、速水行道ら凌霜隊についての藤田清雄の、および水戸藩内争についての山口武秀の文章は、維新内戦の比較的早い時期に触れている。佐川官兵衛についての藤田清雄の、細谷十太夫についての浜田隼雄の文章は、内戦が終局に近づいた段階に触れている。そして、しまね・きよしの大鳥圭介は東北局面から北海道にかけて内戦のはじめから終りまでを通して活動した大鳥を論じており、村上一郎の河井継之助は東北局面と平行して北越局面に激闘を展開した河井をいかに評価するかを論じている。しかし、これらをまとめてみても、それで維新内戦をことごとくのアスペクトから論じつくしたことになるどころか、ごく小さな部分部分に触れたことにしかなっていない。『明治の群像』では、戦争に参加した何人かの人びと、とくに賊と呼ばれることを辞さなかった人びとの個々について、その一人一人の内面の条理や心情を探ってみたかっただけである。しかし、思うに、厖大な維新内戦の内側の襞（ひだ）をほぐしてゆくには、他にこれという方法もないであろう。多くの「進歩的」歴史家が、相対峙した東北軍と西軍とを比較して、東北軍が遅れた政治綱領をもっており、西軍はやや進んだ政治綱領をもっていたから、西軍の勝利に歴史的必然性があったというように解説しているが、これははたしていかがなものであろうか。また、戦争の発起について、西軍がより早く戦機に投じ、東北軍は遅れていたが故に、西軍は勝利したかのごとくにいう人もあるが、これもまたいかがであろうか。また、一部には民衆が主として西軍の側についたが故に、東北軍は勝利し得なかったようにいう人もあるが、はたしてそういうことができるか。これらはいずれも、西欧の市民革命やパリ・コンミューンやロシア革命の形態を日本の明治維新に当てはめて論じているにすぎないように思われる。

以下きわめて断片的にとどまるのではあるが、この厖大な内戦を見てゆく上で、気づくことを追ってみよう。

それを精確に法則化し得るなぞというのは、どう考えてもまだ先のことである。

鳥羽・伏見の意味

戊辰内戦を、鳥羽・伏見における官幕両軍の衝突から始めて江戸城明けわたしを中心とする軸で見てゆこうとする考え方は、明治以来有力である。最近では、石井孝の『維新の内乱』でも、「鳥羽・伏見戦争は、いうまでもなく戊辰戦争第一段階のもっとも重要な戦争であるばかりでなく、戊辰戦争の全過程において決定的な重要性をもつ戦争である」（二〇四頁）と規定されている。石井孝と原口清の間には、戊辰戦争をいくつの段階に区切るかとか、どの戦闘をもって最大の意義をもつ戦闘とみなすかとかいった点について論争が行なわれたが、それらはどの程度深い意味をもったであろうか。結局は、両者とも、大政奉還―列藩会議（徳川将軍を議長とする）のコースか、それとも挙兵討幕のコースかという二者択一で、全戦争過程を割り切ろうとしている。つまりは討幕にプラスの価値があったと見るのである。石井、原口以外も、ほとんどすべての歴史家は、結局において東北軍が敗れ、薩長によって天下が統一されてよかったのだということを前提に内戦過程を見ているようである。だがほんとうにそうだったのだろうか。別の可能性はなかったろうか。

わたしは、鳥羽・伏見の間に一発の砲声起るや……というように内戦の歴史を書きはじめる既往のすべての史書に疑いをもっている。それは、尊皇とか討幕とか攘夷という価値づけを一度こわしてみなくてはならないとする見方からであり、かつまた戦争を政治の直接の延長と見る見方に疑いをもつ見方からである。

鳥羽・伏見の一発の砲声が、意味がなかったと思うのではない。が、その意味は、政治主義的な討幕史観――それは明治以来、左右両翼の歴史家に共通している――が与える意味とはなはだしく異なる。わたしは鳥羽・伏見の戦闘は、幕閣の一部軍事官僚と薩長（第一の敵は薩摩）との間の私闘としてけりがつけられる戦闘であったと思う。京都御所における朝議も、はじめは私闘として取扱おうとした。それを、むりやりに小松宮に節刀を賜

るとか、錦旗をひるがえすとか工作して、このごく局部的な戦闘を「錦旗にはむかった」という形式にあえてしたのは、一つの政治的アドバルンを上げてみようとする岩倉具視ならびに薩長有志の冒険であった。冒険が政治的に成功して、「錦旗にはむかうものがいる」故に討幕親征の時である、という結論を引き出し、いたるところの藩に、「錦旗にはむかうか否か」の二者択一を迫るという形式で、京都政権の「復古」をかためて行ったのが岩倉らと薩長の手口であった。しかも、この間に日本の新しい権力をしてイギリスのアジア侵略の手先きとする転換が進行した。これは、鳥羽・伏見戦闘が、いかにも錦旗をさしはさんでの堂々たる緒戦であり、以後一連の戦役を主導するものであったかのごとき幻想を、事後的に附与した手口であって、わたしらは、その欺満をあばき、鳥羽・伏見の戦いはあくまで私闘として片づけられるべきものであって、爾後の戦役と切りはなされるべきものであると考えねばなるまい。

小松宮に節力を賜ったり、錦旗を東寺に出したからといって、何ら堂々たる戦争開始の宣言もなく、官軍の編成も盟約もなく、戦争としては一切これ間に合せのものであって、であるが故に、結果において幕軍が後退したにせよ、この戦闘自体が戦争としての局面的な発展をもつ性質はなかったのである。ただ政治的プロパガンダによって「勝てば官軍、敗ければ賊」という、なりゆきの精神ムードだけをきわだたせたこの戦闘を、その際事後的に打ち上げられた政治的アドバルンの成果から、いかにも意味ふかいものであるように取扱うのは、戦史研究の上では納得できないことである。今日いまだに政治主義的な学者たちが、むりにこれを新局面をひらいた戦争であるかのように展開してみせようとするから、徳富蘇峰を頂点とする皇国史観がそのまま左翼歴史家にもうけつがれ、どちらの側がブルジョア的であるとか、どちらの側が封建軍隊であるかということで黒白がつくかのごとくに考えられているのである。

この有名無実の私的戦闘が、いかに政治的にイデオロギーの虚妄に利用されたか？　戦闘自体よりもただちに畿内各藩、とくに彦根・津・姫路等諸藩の去就、ひいては山陽筋とくに岡山藩・広島藩の向背、三井・小野・鴻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com